

# やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

伊勢神宮の劍先のおはらい札に、紙を丸めたクジをひつけるオハライヅケは吊りクジ(玉クジ)の一種で、茶碗から飛び出すクジは振りクジ、口づけの長短で決めるのは引きクジなどと言える。

商店街などで買い物をして券をもらい、これをためて行う福引きがある。色の異なる小さな玉を入れた八角の木箱をハンドルで回転させて玉を外に飛び出させるもので、大正期に発明され、考案者の名前を付けて「新井式回転抽選器」というが、俗にいうガラガラだ。これも振りクジの一種だろう。木箱の中の玉がジャラジャラ動く音や当たりクジが出た時に振られるにぎやかな鐘の響きも楽しいが、最近見る機会が減った。摂津箕面の龍安寺では、宝クジの起源とも言われる「箕面富」が1月

7日に行われていた。参詣した人々の名前を記した小さな木の札を木箱に入れ、蓋を開けた小さな穴から長い錐で当たり札3枚を突き刺すので、突きクジになる。当たると祈とうされた厄除招福の札が授けられた。18世紀末の『摂津名所図会』には、クジの様子を見守る大勢の参詣人が描かれている。

春日若宮おん祭では、毎年12月初旬に、春日大社の旧神領で構成する大和土參勤春日講の人々が集まり、市内餅飯殿町の大宿所に保管されているクジで大和土のお渡り行列の役割を決める。祭務幹事が「大紋」や「隨兵」などの役割ごとに紙縋りのクジを引く。このクジは毎年同じものを用い、

春日若宮おん祭の大和土參勤春日講のクジ



## 新たに注目集めるクジ

今から45年余りも昔、オイルショックで就職難の時期だった。たまたまこのあぶりだしをするところ、「待てば海路の日和あり」の文字が浮かび出た。おかげで気持ちが少

端には集落の名前が記されている。紙縋りのクジを引くので引きクジである。

神社のお神籬では、生駒山の西麓の瓢箪山稻荷神社(東大阪市)に珍しいクジがある。やきぬき、あぶり出し、普通のお神籬と3種類のクジがセットになっている。やきぬきは、たばこやマッチなど小さな火を付けると帯状に薄紙が焼け広がり、吉凶の一つだけが焼き抜け。あぶり出しは、火を近づけると文字が浮き出るようになっている。

これから45年余りも昔、オイルショックで就職難の時期だった。たまたまこのあぶりだしをするところ、「待てば海路の日和あり」の文字が浮かび出た。おかげで気持ちが少し穏やかになった。ある年、正月に宝山寺に参拝する時、クジを求めるときどり、クジを引くので引きクジである。落胆したが、帰り道に大吉のクジが足元に落ちていた。

労働をする時、祭りを行なう時、將軍を決める時、戦う時、自らの行く末を占う時など、歴史のさまざまの場面で行われてきたクジは、いま新たに注目を浴び始めている。「くじ引き民主主義」の試みがヨーロッパで広がりを見せているというのだ。抽選で選ばれた一般市民が国家や地域の課題を時聞をかけてじっくり直接討議するのがロトトクラシード。国民の不安と忍耐をよそに、政治家と官僚と企業が国政を私物化している。退廃と混沌を極めた代議制民主主義の國にも、新たな希望が見出せるかもしない。